

【報告】 オンラインシンポジウム 仏教×SDGs×ジェンダー ―身近な課題から持続可能な世界を考える―

開催日時：2022年06月28日（火）14:00-16:15

会場：YouTube Live 配信、深草キャンパス顕真館（学内者限定）、築地本願寺（ライブビューイング）

参加者人数 約 120 名

---

■登壇者・題目：

開会あいさつ 岩田 真美（龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター長）

講演1 「仏教とジェンダー ―教義と現実の狭間で―」

戸松 義晴（全日本仏教会 前理事長）

講演2 「仏教 SDGs ―龍谷大学の取り組み―」

入澤 崇（龍谷大学 学長）

ディスカッション

提言1 「LGBTQ/SOGI ―身近な性の多様性に気づく―」

安食 真城（龍谷大学 宗教部課長）

提言2 「お寺の中のジェンダー不平等」

西永 亜紀子（SDGs おてらネットワーク代表）

全体討論

閉会あいさつ

西永 亜紀子

■総合司会 岩田 真美

---

【報告のポイント】

貧困・飢餓・紛争・気候変動など現代における世界危機は人間の営みや欲望が生み出した。持続可能な開発目標 SDGs の「誰一人取り残さない」という理念は、我々も「取り残される」かもしれない当事者であるという認識を投げかける。ひとりひとりの行動意識の変革なくして SDGs は達成不可能であり、人間の価値観・生き方を変える仏教の思想が必要である。本シンポジウムでは仏教×SDGs の可能性が提案された。

また、身近にあるジェンダー問題は人権の尊重・包摂・公平の価値の実現のため SDGs の達成に欠かすことのできない一課題である。

【概要】

シンポジウムは YouTube を媒介としたオンラインライブ配信と、築地本願寺におけるライブビューイングという形式で開催した。また、龍谷大学関係者に限り、配信会場である深草キャンパス顕真館において現地参加を可能とした。

岩田真美氏によって開会の挨拶と開催趣旨説明がなされ、戸松義晴氏、入澤崇氏の講演が

行なわれた。続いて安食真城氏、西永亜紀子氏の提言をふまえた全体討論が行なわれ、西永氏による閉会の挨拶で幕を閉じた。なお、総合司会は岩田氏が務めた。



岩田 真美氏

諸氏の報告内容は以下の通りである。

戸松義晴氏は LGBTQ 当事者のカミングアウトは家族や友人などの親しい関係にあるほど難しい、という声を聞き、寺院がジェンダーや LGBTQ の相談所となることを志す。しかし、女性問題という視座からみても、日本における女性の社会進出は遅れている現状であり、全日本仏教会に所属する主な 10 宗派（曹洞宗、浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、浄土宗、日蓮宗、高野山真言宗、臨済宗妙心寺派、天台宗、真言宗智山派、真言宗豊山派）においても意思決定の場（宗議会）に女性がほとんどかかわっていないことが明かされた。歴史的にみると日本の仏教における女性差別、差別戒名、戦争協力などの事象は、その時代のマジョリティを獲得した考えに迎合して行なわれたと考えられており、この反省が現代においても活かされているのか、再考が必要であると主張する。問題の解決は、慈悲を思いではなく形にして示すことが仏教の本来の姿であると述べられ、全日本仏教会における仏教と SDGs を主題にしたシンポジウムの開催（2020 年）などの取組みが紹介された。また、女性が配偶者を看取ることが多いことに触れ、葬送儀礼や墓所を管理している実情について人口動態を提示しつつ紹介し、寺院の意思決定の場に女性がかわらなければ、仏教は女性に寄り添えないと訴えた。最後に、言葉だけでなく、実践が必要であることを強調した。



戸松 義晴氏

入澤崇氏は、近江商人の「売り手よし、買い手よし、世間よし」という言葉の「世間よし」の発想は仏教精神であり、SDGsに通じることを述べた。また、阿弥陀如来の誓願である「撰取不捨」はまさに聖と俗の結節点でもあって、アジアに仏教が広がった理由も菩薩が人々の安寧を願う「一切衆生」の思想にあったことを指摘する。また、SDGs項目を掲げるのみで、意識・行動が変わらない限りSDGsの達成はありえないが、その意識を変えるものが仏教であり、「自省利他」の精神から行なわれる龍谷大学の仏教SDGsの活動を取上げた（2021年6月ReACTIONの開設等、他三件）。さらに「世間よし」の理念に基づいて推進されているソーシャルビジネス（2019年ユヌスソーシャルビジネスリサーチセンター（YSBRC）設立等）が紹介され、龍谷大学ではSDGsが打ち立てられる以前からそれに相当する活動が行なわれていたことを語る。次に学生が地域と連携して取組んだ仏教SDGsを体現する活動が紹介され（淡路島放置竹林をメンマに加工する活動等、他四件）、さらに、龍谷大学出身者による仏教SDGsを体現するビジネスが紹介された。そのなかで、障がい者の雇用問題についても言及があった。深草キャンパス内のカフェ樹林における健常学生と障がい者の協働が紹介され、龍谷大生の特徴は若者が若者の可能性を引き出し活動することであると述べる。また、SDGsの項目の一つである環境問題についても、引き起こすのは人間であり、森林破壊は人間破壊につながることを考えるべき、改めて水俣病等の過去の事例を直視し、負の遺産を遺してはならないと強調した。最後に釈尊の「一切衆生の利益・安楽のために」という言葉を紹介し、LGBTQ、ジェンダー不平等で悩む人々も、この「一切衆生」に含まれることを説いた。氏は、仏教界、仏教系大学がこの精神を如何なる形で示すのか問われているとまとめた。



入澤 崇氏

5分間の休憩の後、安食真城氏・西永亜紀子氏の提言によって、ディスカッションが行なわれた。

安食氏は提言の冒頭で、本シンポジウムが開催された6月はプライド月間であり、さらに開催当日である6月28日は、LGBTQ迫害に対する抵抗運動（1969年ストーンウォール事件―執筆者補足）が起き、性的少数者の権利獲得運動のきっかけになった日であることにふれた。

龍谷大学では2016年から「LGBTQ/SOGI」に対する取組みが行なわれており、学内で実施したアンケート調査について紹介された。性的嗜好や性自認は他人の認識によるものでな

く、本人の認識によるものであるが、他人の言葉に傷つく当事者の声を聞き、大学も家庭も仏教も居場所になり得ていない現状に気が付いたという。これをふまえて、龍谷大学では自らの性自認に従って大学施設を使用できるように「多機能トイレ」の表示を「誰でもトイレ」に改めるなどの環境整備と理解の醸成を図ったが、学内の車いすユーザーから意見が寄せられたため、2021年12月に「みんなのキャンパストイレフォーラム」を開催した。トイレ不足の問題が語られるなかで、性別移行（性表現や肉体などの）の理解不足が浮彫りとなり、マジョリティ側における認識の必要性を考えた。そこで、2020年度から行なわれている龍谷大学教職員対象プログラムにおいて、性やジェンダーに関するプログラムを取扱うも、現状では目標は未達成であることが述べられた。氏はSDGsやジェンダーの問題に当事者意識を抱き、行動することの重要性を主張し、「LGBTQ/SOGI」の問題解決は、人権問題の解決とも共通することを指摘した。また、この問題構造は現在の仏教のあり方とも共通しており、龍谷大学の意識、行動によって、他の仏教系大学に波及させたいと展望した。



安食 真城氏

続いて、西永氏は、自身の坊守（浄土真宗における住職の配偶者—執筆者補足）経験を基に提言を行なった。浄土真宗の規約では、坊守は住職の補佐ではなく、住職とともに寺院を運営するものと定められているが、実態は異なると指摘する。氏は寺院や仏教界において「当たり前」とされる女性の役割分担に漠然とした疑念を抱いていたが、後にこれが「性別役割分担の押し付け＝アンコンシャスバイアス」であったと知る。日本のジェンダーギャップは一般社会においては改善へ向かっているとされるが、寺院内で依然として存在する性別役割分担は、意思決定の場において圧倒的に女性が少ないことに原因があると指摘する。女性は意思決定の場に出ることを望まない（関心がない）という意見を聞くが、氏はこれを否定し、女性の社会進出を阻む「ガラスの天井」問題にふれる。この問題は、女性の能力の低さや性別による適正ではなく社会や組織の構造が原因であり、女性はケア労働に従事させられるがために社会活動に参画し難く、女性がキャリアを奪われることで女性リーダーが育たない悪循環が指摘された。なかでも寺院はジェンダー後進国日本の縮図であり、現在の仏教界は「持続可能」とは言い難い、マイノリティや弱者の意見を汲み取らない寺院を、苦しみを抱えた人が頼りたいと思うかと氏は問いかける。また、仏教は平等性を大切にし、浄土真宗においてもすべての人を救いたいという阿弥陀如来の本願を聞くことを重視する

ことにふれて、変わるべきところは変えて、我々の足元が平等であることの重要性を主張した。最後に、仏教界はどのように変容していけるのか、本シンポジウムにおいて考えたいとして提言を締め括った。



西永 亜紀子氏

安食・西永両氏の提言の後、全体討論が行なわれた。

総合司会である岩田氏から安食氏に対する質疑は、身近な性の多様性に気づくことが大事であるが、安食氏がいうように実践につなげていくためにはどうしたらよいかと問う。

安食氏は様々なきっかけがあるとして、レインボーの数珠やステッカーをつけたり、日曜学校で小学生に話をすることなどを提案した。また、ネットや社会等において言葉が独り歩きしている現状や性的マイノリティに対する誤解について事例をあげて、大学としては正確な情報にアクセス・発信できるようにしたいと抱負を述べた。目立たないSDGsの活動や、未達成の事柄に目を向けて、我々自身が不完全であると認識して活動することが必要であると語った。

続いて、岩田氏から西永氏への質疑では、寺院に限らず、伝統や文化のなかのジェンダー問題は人権問題として十分認識されていない現状があるように思われるが、持続可能な社会や仏教界に必要なものは何かと問いかける。

西永氏は、自分と他者は異なる人生を生きていることを認識し、「当たり前」を問い直すことが大事なことであるとまとめた。その方法として、「他流試合」を行なっていると述べる。西永氏は、キリスト教系のイベントに一人で参加した体験を語り、ほかの宗教・宗派と浄土真宗との異同点見出すことで、楽しみつつ様々な人がいることを確認した体験を語る。また、家族などの身近な存在であるほど理想を押し付けがちになるが、子育ての経験から、子どもには子どもの人生があることを教えられたと述べた。続いて、岩田氏は両氏の提言をふまえたうえで、講演者の二名にも質問を行なった。

岩田氏は、近年の各宗派の研究機関におけるジェンダーやSDGsの取り組みに言及しつつ、現代社会における仏教の平等性について戸松氏に尋ねた。

戸松氏は、社会は言葉よりも現実を見て感じ、理解するという見解を示し、宗教理念は現実のなかで形になり、日常のなかで感じられて初めて意味を持つと述べる。日本の女性の社会進出については、最初は数値目標を制度的に定めることを提案し、仏教界も各宗議会で女

性議員を増やしていく必要性を語る。また、合理性や理論、信仰のみならず「人」が大事であることを強調し、仏教においても人間のあたたかさが今後大事になる、人に寄り添おうとする姿勢がジェンダー格差の改善にもつながると述べた。

次に岩田氏は入澤氏に対して、仏教 SDGs の意義や可能性について尋ねた。

入澤氏は、マジョリティの意識を変えていく必要性を述べて、龍谷大学でも仏教 SDGs の活動を行なう学生は、ごく一部の「マイノリティ」であると指摘する。若者が若者に与える感化の力は非常に大きく、身近なところで自然に手を差しのべることのできる学生が増えることで社会問題解決の道が開けると語った。

岩田氏は全体討論の最後に、学ぶこと、知ることは慈悲の本質であるというが、それは実践することによって体現されることを語った。また、仏教思想を社会へ活かすためには、まず仏教関係者が実践し、マイノリティに思いを馳せ、組織を問い直すことで、持続可能な組織、社会、世界の一步となるのではないかと期待を寄せた。

閉会の辞において西永氏は、全体を振り返り、今回のシンポジウムのテーマで身近な人とディスカッションをすることを求めた。開催するだけでは意味がなく、それを如何に実践するかが重要であると述べられ、シンポジウムは盛況のうちに閉幕した。



左から岩田氏、戸松氏、入澤氏、安食氏、西永氏

(文責 ジェンダーと宗教研究センター)